

科目名	日本文化特殊研究	担当者	イノウエ ケン 井上 健	期間	通年	単位数	4
-----	----------	-----	-----------------	----	----	-----	---

【科目概要】

目 的	戦後日本文化における 1950 年代は、政治的には冷戦体制の国内化たる「五十五年体制」が成立し、社会・経済的には、大衆消費社会到来が高度経済成長期へと展開していく、まぎれもない過渡期であるとともに、戦後思想の出発点と称すべき 10 年間であった。本講義は、1950 年代の日本文化論の系譜をたどり、その再評価を通じて、戦後日本の基底構造にあらためて光を当てようとするものである。 丸山眞男、川島武宜、大塚久雄など戦後啓蒙の代表的担い手たちは、「西洋対日本」、「近代対前近代」という二項対立を自明の論理枠組として、到達目標としての「近代」を熱く語ることを共通の特性としていた。前期は、青木保『「日本文化論」の変容——戦後日本の文化的アイデンティティ』を基本教材として、ベネディクト『菊と刀』から、丸山、川島、大塚、加藤周一、竹内好を経て、『共同研究 転向』、橋川文三に至る、50 年代日本文化論、近代化論の系譜を、(1)戦前の思想との断絶と連続性、(2)そこにおいて、いかなる西欧がいかにモデル化されていたか、の 2 点に着目してたどる。後期は、柳父章『近代日本語の思想——翻訳文体成立事情』を参照しつつ、1950 年代日本の思想と文化と文学を、「日本文化論」と「翻訳」をキーワードとして再検証してみたい。		
到達目標	【一般目標 (GIO)】 資料や先行研究をしっかりと読み込み、対話し、批判的に検討し、弁証法的に総合する力を身に着ける。その結果を、一つの論として、体裁を整えつつ、まとめあげていく方法と技法に習熟する。 【行動目標 (SB0s)】 通時的視野と共時的問題意識とを有機的に結合していくことによって、思想や文化や文学を、学際的視野から柔軟にとらえていく視点と感受性、批判的思考力を獲得することを目指す。		
学修方略 (方法)	【アクティブラーニングの有無・学修媒体等】 インタラクティブなリポート提出システム manaba を活用する。 【学修方略 (LS)】 取り上げる作品をきちんと精読してから、一次資料、二次資料の参照に進む。リポート作成にあたっては、「何を明らかにしたいのか」という命題から出発し、それに基づいた構成、章立てを考え、「何が明らかになったのか」が読む者に明確に伝わるように記述する。その間、履修者と科目担当者の間で、十分な質問やコメントのやり取りがあることが望ましい。 【学修時間】 以下の学修時間を目安とする。学修時間は課題リポート 1 本あたりの目安時間。 教材の学習＝15 時間、リポート執筆＝15 時間 リポート推敲・取りまとめ＝15 時間		
スケジュール	[教材 1] リポート課題(1)初稿提出締切＝6 月 15 日 リポート課題(1)最終稿提出締切＝7 月 15 日 リポート課題(2)初稿提出締切＝8 月 15 日 リポート課題(2)最終稿提出締切＝前期提出期限 [教材 2] リポート課題(1)初稿提出締切＝10 月 15 日 リポート課題(1)最終稿提出締切＝11 月 15 日 リポート課題(2)初稿提出締切＝12 月 15 日 リポート課題(2)最終稿提出締切＝後期提出期限		
成績評価	種 別	割合	評価基準
	リポート	85 %	論文にふさわしい構成、記述になっているか、結論に一定程度、独自性があるか、を判断基準とする。
	観察記録	15 %	学習姿勢全般を評価の対象とする。
履修者への要望	リポート執筆は、学位取得論文の基礎工事部分にあたる。短いリポートがしっかりとまとめられなくては、学位論文執筆はとうてい覚束ない。まずは教材を、自分が主たる素材として取り上げようとする作品やテキストをしっかりと読解すること。その上で、課題、テーマを発見し、必要な調査をし、資料や先行研究と対話していく。manaba のコミュニティや掲示板など、学習ツールを積極的に活用することが望ましい。リポートの分量は特に指定しないが、4,000 字程度が一つの基準となる。		

【レポート課題】

基 本 教 材 1	
教材の概要	著者名： 青木保 教材名： 『「日本文化論」の変容——戦後日本の文化的アイデンティティ』(中公文庫、1999) ISBN: 978-4122033993 590 円＋税
	『「日本文化論」の変容——戦後日本の文化的アイデンティティ』は 1990 年刊行。ルース・ベネディクト『菊と刀』(1946) から説き起こして、戦後日本文化論の流れを、「否定的特殊性の認識」の時期(1945～54) から、「歴史的相対性の認識」(1955～63)、「肯定的特殊性の認識」(1964～83) へと続く、特殊性の認識から普遍性の認識に至る過程として取りまとめている。
参考図書	佐藤泉『一九五〇年代、批評の政治学』(中央公論新社、2018) ISBN : 978-4120050688 2000 円＋税 アンドルー・ゴードン編『歴史としての戦後日本(上)(下)』(みすず書房、2001) 上 ISBN: 978-4622036791 2900 円＋税 下 ISBN: 978-4622036807 2800 円＋税 加藤典洋『敗戦後論』(ちくま学芸文庫、2005) ISBN: 978-4480096821 1200 円＋税
履修上のポイント	基本教材は、時代区分を明確にして、日本文化をめぐる議論の推移の流れをコンパクトに整理したもの。受講者には、基本教材を参考にして、大塚久雄『近代化の人的基礎』、川島武宜『日本社会の家族的構成』、丸山眞男『現代政治の思想と行動』など、戦後日本文化論、近代化論の「古典」に自ら当たってみることが求められる。何を読むか、どんなバージョンが入手可能かについては、適宜、担当教員に相談して頂きたい。
レポート課題 1	教材図書の第 2～4 章で言及されている、作家、思想家から一人を選んで、その代表的著作を読み、ポイントをまとめた上で、青木の提起する視座の有効性について論じなさい。 留意点 ：戦後思想の名著にいかなるものがあるのかについては、岩崎稔ほか編『戦後思想の名著 50』(平凡社、2006) などが参考になる。
レポート課題 2	1950 年代(40 年代末、60 年代初を含めて考えてよい) に発表された日本文化論を 2 つ取り上げて、「否定的特殊性」「歴史的相対性」の視点から比較対照することによって、それぞれの有効性と固有性、および限界について論じなさい 留意点 ：1940 年代の終わりに発表されたものから、1960 年代初めの橋川文三あたりまでを対象を含めて差し支えない。

基 本 教 材 2	
教材の概要	著者名： 柳父章 教材名： 『近代日本語の思想——翻訳文体成立事情』(法政大学出版局、2004) ISBN : 978-4588436178 2900 円＋税
	教材は、翻訳研究の泰斗の日本語論、日本語文体論、日本文化論を 11 編集めた論文集である。近代日本語における主語は翻訳文の影響で作られた、という持論を展開した、第 1 章「「主語」は翻訳でつくられた」、第 2 章「「主語」はこうしてつくられた」、第 3 章「小説における主語」が、ことに読みごたえがあるが、「文」概念の成立、文末語や「である」文の生成、漢字の造語力と漢字の意味の空無化、などを論じた他の章も、一読に十二分に値する。
参考図書	柳父章ほか編『日本の翻訳論——アンソロジーと解題』(法政大学出版局、2010) ISBN : 978-4588436161 3300 円＋税 安西徹雄『英文翻訳術』(ちくま学芸文庫、1995) ISBN : 978-4480081971 880 円＋税
履修上のポイント	基本教材は、翻訳論であり日本語論であり、また日本文化論でもある。柳父の基本的立場は、思い切って簡明にまとめれば、(1)A を B に翻訳すると、A でも B でもない、C ができあがる、(2)翻訳語はその中身が問われないことによって、かえって価値を持つ、(3)日本語文体はまさに翻訳で作られた、の 3 点となる。このことを念頭に置いて、基本教材を読み進めて頂きたい。
レポート課題 1	柳父章の著書から 2～3 章を選んで、その内容を要約し、その日本語論、日本語文体論としての妥当性・有効性について、翻訳作品(可能であれば、1950 年代に翻訳されたものが望ましい) から実例を引いて論じなさい。 留意点 ：1950 年代は戦争・占領を経て、翻訳文学の出版が活況を呈した時期であった。カミュ、カフカ、サルトル、フォークナー、メイラーなど。
レポート課題 2	柳父章の書の第 9 章「A+B→C の文化論」を、前期に学習した「1950 年代日本文化論」の系譜に照らしつつ、その射程の幅と有効性について論じなさい。 留意点 ：加藤周一「日本文化の雑種性」(1955) は、重要な参照軸の一つとなる。

基本教材 1

第 1 回	教材の学修：基本教材の概略についての説明
第 2 回	教材の学修：1～2 章
第 3 回	教材の学修：3～4 章
第 4 回	教材の学修：5～6 章
第 5 回	教材の学修：7 章
第 6 回	教材の学修：基本教材についての質疑とディスカッション
第 7 回	先行研究紹介
第 8 回	レポートの題材についての相談
第 9 回	レポートの構成、書き方について
第 10 回	レポート課題 1：初稿作成
第 11 回	レポート課題 1：添削指導 d
第 12 回	レポート課題 1：最終稿作成
第 13 回	レポート課題 2：初稿作成
第 14 回	レポート課題 2：添削指導
第 15 回	レポート課題 2：最終稿作成

基本教材 2

第 1 回	教材の学修：基本教材の概略についての説明
第 2 回	教材の学修：1～2 章
第 3 回	教材の学修：3～4 章
第 4 回	教材の学修：5～6 章
第 5 回	教材の学修：7～8 章
第 6 回	教材の学修：9～11 章
第 7 回	教材の学修：基本教材についての質疑、ディスカッション
第 8 回	レポートで事例として取り上げる翻訳作品をめぐって
第 9 回	レポートのテーマと素材をめぐって
第 10 回	レポート課題 1：初稿作成
第 11 回	レポート課題 1：添削指導
第 12 回	レポート課題 1：最終稿作成
第 13 回	レポート課題 2：初稿作成
第 14 回	レポート課題 2：添削指導
第 15 回	レポート課題 2：最終稿作成